

## 選手のタレント発掘およびトランスファーへの試み

桜井智野風<sup>1)</sup> 三宅聡<sup>2)</sup>

1) 桐蔭横浜大学 2) 日本陸上競技連盟

### はじめに

タレント発掘プログラムとは、競技スポーツに対して優れた素質を有する人材を発掘し、オリンピック等の国際競技大会で活躍する競技者を輩出することを最終目標にしている。このような取り組みは、競技力向上の施策の一つとして世界各国が取り組んでいる。アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアといった従来のスポーツ先進国だけでなく、近年では中国、韓国、カタールなどのアジアや中東諸国においても、様々なアプローチによるタレント発掘プログラムが実施されているのが現状である。一方でKlint & Weiss<sup>1)</sup>が提示したスポーツにおけるトランスファー (Sport transfer) という概念がある。これは、あるスポーツをやめたが異なるレベルや目的を持つスポーツに再び参加する行動を示すものである。陸上競技においても、種目間の転向や陸上以外の他競技から陸上種目への転向を示すものとして、選手のタレント発掘と同様にタレントトランスファーとして近年重視度が高まってきている。

### 驚くべき現状

各都道府県での優秀選手を東京に集め、タレント発掘と将来的に一流選手になる為の意識付け、及び指導者に対する教育・競技者育成プログラムの啓蒙活動を行う目的で、毎年1月に味の素ナショナルトレーニングセンターで開催されているのがトップトレーニングキャンプである。これには、各県の中学生(U16)男女各一人が選抜されて参加し、3日間の講義と実技を受講するものである。このキャンプでは、「今後種目トランスファーも考慮し多種目を経験させる」という考えのもと、自分の専門種目に限定せず、走跳投(ハードル・走高跳・砲丸投)の種目体験を行わせている。選手からは、普段練習しない種目を行えたので非常に楽しかったという感想

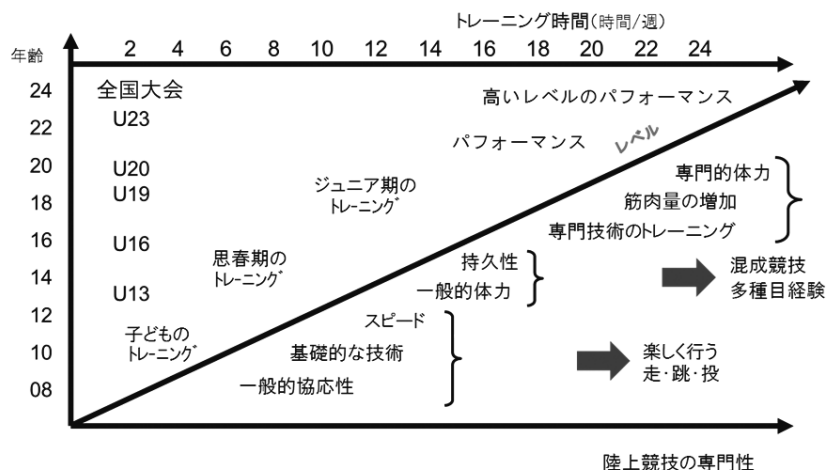
を得ると同時に、部活動、学校の授業を通じて走高跳の経験が無い者が全体の約3分の1を占めることもわかった。また、短距離や投てきを専門とする選手の中に、走高跳に有望なタレントを持っている選手も数名いるように感じられた。このように、各都道府県のトップの選手であっても、多種目を経験した上での専門種目の絞り込みが行われていないのが現状である。

また、全国の子どもたちに走跳投の競技者育成プログラムの考え方に基づいた練習方法を伝え、タレント発掘および都道府県陸協との連携の強化を目的として、JAAFアスリート発掘・育成プロジェクトU16クリニックを全国で実施している。このクリニックで全国を巡り指導していると、子供時代の遊び自体が変容しているために、子供たちが走跳投といった様々な動きを経験していないと感じる場面が多い。

### 種目選択の時期とは

図表1は、陸上競技における年齢とトレーニングの関係を表したものである。前項で示したように、「楽しく行う」「多種目経験」といったジュニア期までに重要とされている項目が、実際の指導場面において行われている割合が非常に低い。子どもから成人へと成長するにつれて、人間の形態やその機能は著しく変化する。特にジュニア期における身体や心の変化は顕著であり、この時期の行動がシニア期以降のパフォーマンスの礎となることは明確である。そこで、ジュニア期の段階から競技者として育成するにあたっては、発育・発達に基づいた長期計画が必要となってくる。計画立案のためには、相応の経験も必要となる。この経験が、多岐にわたる身体活動の体験、つまりは多種目経験と言うことになる。

この種目選択の時期に関しては様々な見方がある。ジュニア期の身体の成長のピークは、個人に



図表1 年齢とトレーニング

よって4歳程度の差がみられるともいわれ、個々に応じた種目の選択とトレーニングの実践が大切であることから考えると、高校生となっても決して遅くないと考えられる。逆に発育・発達に則した種目選択やトレーニングを行わなかったために、パフォーマンスが向上しなかったりバーンアウトに陥ったりするほか、早期専門化の影響からスポーツ障害で競技を断念せざるを得ない状況になるなどの弊害も考えられる。

### 指導者の「目」の育成

図表2に、中学校における主な競技別運動部設置数の推移を示す。ここ数年、男女とも陸上競技部の設置数は減少傾向を示しており、主要な運動部の中でもその減少割合は高い。これに伴い、中学校における陸上競技部がある学校の割合は全国中学校の約60%（2012年度）となっており、中学生の40%は陸上競技を行う機会を与えられていないともいえる。中学校の陸上競技部が減少している大きな要因は、少子化と指導者の不足であると考えられている。中学校入学以降に陸上競技を始める子どもが多いことを考えると、ジュニア指導者の育成が急務といえる。

特に、発育発達の著しいジュニア期においては、「選手が第一、勝つことは第二」（アスリートファースト、ウィニングセカンド）の精神のもと、勝利至上主義に走るのではなく、選手的人間的成長を促したり、陸上競技の楽しさや特性に触れさせ陸上競技を好きにさせたりすることも、指導者の能力に頼るところが大きい。

子どもが陸上競技に出会い、いろんな種目を経験しながら、徐々に専門化していくそのすべての過程で重要な役割を果すのが指導者である。子どもが、

遊びの中で動きを獲得するのが難しくなっている今、指導者が幅広い種目の指導法を身につけジュニア期にはなるべく多くの動きを経験させることが大切であり、そのためにも複数種目にチャレンジさせることが重要となる。このため指導者は、子ども達に様々な種目を経験させ、その中で指導者とともに子どもの適性を見極めていく「目」を持つことが重要になる。これは子どもが陸上競技を始めた後、パフォーマンスの伸び悩みや身体の成長変化に伴い、種目を変更するトランスファーの際にも必要不可欠な能力である。

この「目」の獲得には、指導者自身が様々な種目を経験していることが必要となる。こういった考えから、より多くの基礎的な知識を持ち幅広く初心者指導を行える、指導者の養成、指導者の「目」の育成を目指して行かなければならない。

### 指導者養成からのアプローチ

平成23年度までの日本陸上競技連盟における指導者養成制度では、年間で育成が可能人数は、公認コーチ約60名、公認指導員約100名となっていた。公認コーチに関しては連盟による直接講習ということもあり、年間の受け入れ可能数には限度があった。また、より多くの指導者を養成できる公認指導員が年間4会場程度しか開催されておらず、指導者の資格を取りたいというニーズに答えられる状況には程遠い状況であった。また講習のカリキュラムは提示しているものの、具体的な内容・講師の選定などを開催都道府県陸協に一任していること、選手強化に強く傾倒している講習内容も課題であった。

そこで平成23年度より、新指導者養成システム（JAAF公認ジュニアコーチ制度）を設立し、開催方

図表 2 中学校における主な競技別運動部設置数の推移<sup>2)</sup>

	競技名	平成 12 年	平成 22 年	増△減数	増△減率 (パーセント)
男子	軟式野球	8,992	8,919	△ 73	△ 0.8
	バスケットボール	7,511	7,176	△ 335	△ 4.5
	卓球	7,212	6,903	△ 309	△ 4.3
	サッカー	7,085	6,909	△ 176	△ 2.5
	陸上競技	7,250	6,336	△ 914	△ 12.6
女子	バレーボール	9,087	8,962	△ 125	△ 1.4
	バスケットボール	7,765	7,456	△ 309	△ 4.0
	ソフトテニス	7,696	7,252	△ 444	△ 5.8
	陸上競技	7,138	6,242	△ 896	△ 12.6
	卓球	6,270	5,928	△ 342	△ 5.5

(出典)日本中学校体育連盟調べ

法を全国的に統一し同一テキストを使用することにより、全国どの地域においても共通の知識を持った指導者養成を展開することが可能になると考えられ、より積極的な指導者養成を行っている。これにより、新指導者養成システムは JAAF 公認コーチ（日体協公認コーチ）、JAAF 公認ジュニアコーチ（日体協公認指導員）と分類されることとなった。JAAF 公認コーチは、受講資格を「都道府県選手団の監督・コーチ。都道府県で指導者育成の中心的な役割を担う者」とし、都道府県陸協からの推薦者のみを受講対象者とする。JAAF 公認ジュニアコーチは、その役割を「地域クラブ、小中高の部活動で、幅広く指導を行う者」とし、特に初心者指導ができる指導者の大量養成を目指し年間 10 会場程度で開催している。

JAAF 公認ジュニアコーチは、タレント発掘・トランスファーに必要な幅広い種目の指導法を身につけることを大きな目標としているため、指導者自身が様々な種目を経験するカリキュラムとなっている。各種目の特性やトレーニング方法を、身を持って体験し指導法を考案していく過程は、子ども達に様々な種目を経験させ、その中で子どもの適性を見極めていく「目」の育成そのものと考えている。

国際陸上競技連盟（IAAF）が認定しているコーチ資格制度では、最も下級の基礎となる「レベル I」において、陸上競技の全ての種目について導入段階の指導ができるようなカリキュラムの設定がなされている。日本国内においては取得が少々困難ではあるが、機会があれば参考にさせていただきチャレンジしていただきたい。

## まとめ

為末大選手を中学校時代に指導した河野裕二先生のお話の中に、「為末選手の将来を見据えて、中学時代は怪我をさせないということを第一に考え、全力を出させないようにしていた」という一節があったことを思い出す。子どもの将来を決めるのは子ども自身でもあるが、その方向性を示してあげるのは、指導者・コーチといえる。より適切なものに向かえるように様々な考えを保持することは指導者としての責務であり、その多彩な指導により子どものタレントは開花し指導者としての満足を得ることが出来ることを忘れてはいけないと考える。

## 参考文献

- 1) Klint, K. & Weiss, M. (1986). Dropping in and dropping out: Participation motives of current and former youth gymnasts. *Canadian Journal of Applied Sport Sciences*, 11, 106-114.
- 2) 平成 22 年度文部科学白書